

## 特 別 講 演

座長 三 須 幹 男  
(帯広畜産大学)

### 家畜改良の理念

八 戸 芳 夫 (北大農学部)

畜産に課せられた社会的要請の第一にあげられるものは動物性蛋白質食品の増産であるが、我々人類が必要とする動物性蛋白質は、そのものが高分子化合物の中でも最も複雑な構造をもち、その生合成の過程も複雑をきわめているために、合成化学工業が次々と人類の愛用している天然物を合成物におきかえて行きつつある現在でも、動物性蛋白質食品は合成化に抗し、最後の砦を守るものとなるであろう。

家畜の改良は、この良質であつて嗜好性もたかく、しかも高価である動物性蛋白質を生産する精巧な機械すなわち人類の必須アミノ酸を濃縮する機械の性能を遺伝的に改良して生産を向上することにある。

そのための方法を確立する基礎理念については、戦前と戦後とでは大きな相違をきたし、家畜改良の推進上、古い改良理念はむしろ障害にさえなつてきているのが実状であろう。もともと、家畜の改良はその国の国民性を強く反映するものであり、従来は、兎角改良の重点を個畜の記録向上において経過し、集団全体のレベルアップを二次的に考えていた点は深く反省しなければならない。

集団遺伝学理論の導入は我々に多くの反省と今後の改良方針に対する明るい変革を与えてくれたものと言える。遺伝的能力の推定、正確度のかい選抜交配手段、遺伝的改良量の予測手段その他、いわゆる能力は安易に固定できるという従来の改良手段を根本から変え、遺伝的改良に多大の合理性を与えたものである。

近い将来における家畜改良への貢献度のかいことが予測されるものとして分子遺伝学的知識がある。家畜の生産性を改良する場合にはいわゆる量的形質が評価の対象となることは当然であるが、一般に多数の遺伝子によつて支配されており、しかも環境要因による変動も大きいため、能力検定、遺伝的要因の解析、選抜交配といった過程を何回もくり返すことが必要となる。しかし、世代間隔の短い中小家畜ならばともかく、大家畜においては成果の可否をみきわめるまでに長年月をついやす点が難点となるわけで、この改良期間の短縮をねらいとする今一つの攻め手として生理遺伝学的知識の導入が挙げられ、その生理遺伝学の基礎をなす分子遺伝学からの家畜改良への攻略が近い将来実現する可能性を大にしている。すなわち、ヘテロシスを利用する際の合理的な相性の発見、早期能力判定の確実な方法、最適育種環境の発見、個体選抜の確実な手段等々に、この分子遺伝学的分野が大きく貢献する時代が間もなくくるものと思われる。

家畜改良の実際面の進展は、間違いない理論の上に立脚するならば、あとは国が当面の問題のみな

らず家畜改良といういわば将来への投資をどの程度に考えるかによつて決まり、そして末端まで確実に徹底する改良組織のできることを条件とする。

家畜の遺伝的改良は、ただ外国からの優良個畜の導入のみによつては解決されるものではなく、遺伝子と環境因子との相互作用を考えると、改良はやはりその国その国で充分推進しなければならぬ性格を有するものであることを痛感する。

## 支 部 会 記 事

### 1. 支 部 役 員

昨年12月7日の総会で支部役員の改選が行なわれ、次の方々が決定いたしました。

支 部 長 広瀬可恒

副支部長 三須幹男

支部評議員 有馬俊六郎、安藤丙午郎、遠藤清司、淵名重海、八戸芳夫、早川晋八、平賀即稔、橋爪徳三、工藤規雄、森本明、松村宏、光本教次、難波直樹、那須正次郎、大原久友、大浦義教、先本勇吉、桜井允、鈴木省三、鈴木徳信、島倉亨次郎、高松三守、高倉正臣、坪松戒三、土田鶴吉、安井勉、吉田稔、遊佐孝五（計30名）

### 2. 日本畜産学会評議員の選出

支部評議員会の選考委員会より推選された7名の候補者について畜産学会正会員の信任投票の結果、次の方々が日本畜産学会評議員に選出されました。

平賀即稔、広瀬可恒、三須幹男、大原久友、先本勇吉、安井勉、遊佐孝五。（計7名）

### 3 昭和43年度日本畜産学会北海道支部会計報告（43.4.1～44.3.31）

収 入 302,478 円

前年度より繰入れ	191,219
（内訳） 銀行預金	61,862
振替小切手	93,976
振替一般	5,948
現金	4,433